

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：32643
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：25770012
研究課題名(和文)ライプニッツの公共の福祉論

研究課題名(英文)Leibniz's Idea of Bonum Commune

研究代表者
長綱 啓典(Nagatsuna, Keisuke)

帝京大学・総合教育センター・講師

研究者番号：00646482
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主要な目的は、ライプニッツの公共の福祉論を彼の実践哲学の核心として取り出し、その特徴と歴史的意義を明らかにすることに存する。この目的を実現するために、一年目にはイタリアからルカ・バッソ博士を、二年目にはドイツからセバスティアン・シュトルク博士を招聘し、それぞれ講演を開催した。また、研究代表者自身も、ライプニッツの公共の福祉論の重要なファクターである、彼の保健・衛生行政論について学会発表を行った。これらの研究により、ライプニッツの公共の福祉論の特殊近世的な特徴がこれまで以上に明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this study consists in grasping Leibniz's idea of bonum commune (general welfare) as the heart of his practical philosophy and showing its features and historical significance. To realize it, I invited in the first year of this study Dr. Luca Basso, in the second year Dr. Sebastian Stork, and some lectures by them took place. For myself, I made a presentation in a congress about Leibniz's concept of public health or hygiene which is a very important factor of bonum commune. From these studies, it became more obvious than ever known that Leibniz's idea of bonum commune has some especially early modern features.

研究分野：哲学

キーワード：ライプニッツ 近世ドイツ国家論 公共の福祉 ポリツァイ 保険・衛生行政 宗派化 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

(1) 16世紀から18世紀にかけてドイツ語で書かれた政治的文献の主要目的は「公共の福祉」の概念でもって表示されていた。そのため、主に近世ドイツ国家史論において公共の福祉論の研究が進められてきた。その際、研究者たちの指針となったのは、「近世ドイツの偉大な国家論者たちがみな本来は行政学者であり、福祉論者であったという事実は、これまでまだこのような関連 [= ルター派の領邦国家における政治と宗教の特殊な状況] で評価されたことがなく、それどころかほとんど注目されていない」というH・マイアーの指摘であったと思われる。これまでの研究は、マイアーの指摘に最もうまく当てはまるV・L・v・ゼッケンドルフ(1626-1692)の所説を典型として取り上げながら、17世紀ドイツにおける公共の福祉論の特徴と歴史的意義を明らかにしてきた。

(2) ところが、このような脈絡の中でG・W・ライプニッツ(1646-1716)の公共の福祉論が取り上げられることは、本邦においてはもちろんのこと、ドイツにおいても、ほとんどなかった。同時代の動向と軌を一にして、自身ルター派であるライプニッツも自らの国家論の鍵概念として公共の福祉について詳細に述べているにもかかわらず、である。わずかな例外もあるにはあるが、それらはいずれも限られた分量の記述にとどまり、十分なものであるとはいえない。

(3) 18世紀ドイツにおける公共の福祉論の発展ということ考へるならば、以上のような状況は研究的に大きな欠落であると言わざるを得ない。18世紀にはChr・ヴォルフ(1679-1754)の公共の福祉論が主流をなすが、それに大きな影響を与え、いわば理論的な基礎を与えたのが、ライプニッツの公共の福祉論だからである。こうした欠落を埋めるべく、本研究では17~18世紀ドイツにおける公共の福祉論の展開という観点からライプニッツの所論の特徴と意義を明らかにしたい。以上が本研究開始当初の背景と動機である。

2. 研究の目的

(1) 「公共の福祉」論は、ライプニッツの実践哲学の核心であるにもかかわらず、これまで必ずしも十分に論じられることがなかった。上にも述べたとおり、これは研究上の大きな欠落である。そこで、この欠落を補うことを本研究の主要な目的とする。具体的には、ライプニッツの「公共の福祉」論について、とくにそこにおける「慈愛」の観念の位置づけと役割に注目し、そのことによってその特徴と歴史的意義を明らかにすることを試みる。

(2) ライプニッツの公共の福祉論と一口に言っても、その射程はきわめて広大である。その福祉政策上の提言は、学問・教育、保健・衛生、手工業、経済など、多方面にわたって

なされる。近年、日本においてもそれらの分野におけるライプニッツの業績が個別的に明らかにされつつある。

そこで、これまでほとんど取り上げられることのなかったライプニッツの業績、具体的には保健・衛生行政に関わる彼の構想を取り上げ、個別的なテーマに関する論考を進展させる。

しかし、従来は、個別的なテーマに関する論考に終始し、そこで得られた個々の成果を統一的・全体的な理論のうちに適切に位置づけることを可能にする視点を欠いていた。本研究は、「公共の福祉」論と、その理論上の基礎となる「慈愛」の観念に着目し、そのことによって、ライプニッツの実践哲学についてそうした統一的・全体的な視点を与えることをも目的とする。言い換えるならば、それは、公共の福祉論を軸に据えながら、関連領域における既存の研究成果を一貫性のある形で再編成することである。

3. 研究の方法

(1) ライプニッツ・アカデミー版全集第4系列(政治的著作)第1巻に収録されている諸著作を中心的な考察対象としてこれを読解し、ライプニッツの公共の福祉論における「慈愛」の体系的な位置づけと役割を解明する。

(2) 上記アカデミー版全集第4系列第1巻と時期的に対応している、アカデミー版全集第6系列(哲学的著作)第1巻に収録されている自然法論関連テキストを補助的に用いて、「慈愛」という本来キリスト教的な概念の、政治的文書における機能の仕方を明確にする。

(3) ライプニッツの保健・衛生行政関連テキストを用いて、キリスト教的な「慈愛」の観念が、ライプニッツの保健・衛生行政構想において、どのような変容を被っているのかを検証する。

(4) ライプニッツ以前の公共の福祉論者たち、とくにゼッケンドルフに関する資料を収集し、その公共の福祉論の理解に努める。

4. 研究成果

(1) 二年間の補助事業期間において、二名の外国人研究者を招聘し、国際研究者交流に努めた。いずれの場合も特別講演会を開催した。その際、研究代表者は講演者のハンドアウトの事前翻訳と、講演会当日の通訳を務めた。

一年目にはルカ・バッソ博士をイタリアはパドヴァから招いた。バッソ博士は、ライプニッツの公共の福祉論について、その基礎として彼の独特な正義論が機能していることを詳述した。

二年目にはセバスティアン・シュトルク博士をドイツはベルリンから招いた。シュトルク博士はライプニッツ時代の医学の状況とそれに対するライプニッツの寄与について

報告した。

いずれの講演においても、本邦ではこれまでほとんど紹介されることのなかった資料が多数用いられた。この点で、これらの講演をまとめた論文は、後続の者にとって必読の先行研究となるように思われる(バツ博士の講演は論文として発表済み。シュトルク博士の講演については、論文としての発表準備中)。

(2) 研究代表者は「もうひとつの「最善」

ライプニッツの公共の福祉論」と題する学術論文を発表した。そこでは、中世においては教会や修道院の仕事であった「慈善活動」や「施し」が、近世においては、そしてライプニッツにおいても、国家による一般的な福祉政策の特殊部門、例えば救貧制度や保健・衛生行政へと転化していることが指摘された。この点で、ライプニッツの公共の福祉論の基礎にはたしかに伝統的な「慈愛」の観念が生きてはいるが、それは重大な変容を被っていることが理解された。

(3) また、研究代表者は「医事と教会制度

ライプニッツの保健・衛生行政構想」と題して学会発表をした。本発表において、研究代表者は、ライプニッツの公共の福祉論の重要な局面の一つである彼の保健・衛生行政論について、近世ドイツにおいて見られた「宗派化」に関する議論を参考にしながら、その特徴を明らかにしようとした。発表当日の司会と聴衆のコメントにもあった通り、このようなテーマの研究は日本では間違いなく最初のものであり、海外でもまだほとんどなされていない。そのため、ドイツで進行中の、ライプニッツの政治学に関するハンドブック出版プロジェクトからも、彼の保健・衛生行政構想に関して、一章を執筆してほしい旨の依頼が研究代表者に届いた。このことから、本研究が国内外のライプニッツ研究に与えたインパクトは十分に大きいと言えることができるはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

長綱啓典、「もうひとつの「最善」ライプニッツの公共の福祉論」、帝京大学『総合教育センター論集』、査読有、第5巻、2014年、41～51頁。

ルカ・バツ(著)、長綱啓典(訳)、「ライプニッツにおける政治的共同体と福祉」、『ライプニッツ研究』、査読無、第3巻、2014年、71～89頁。

ルカ・バツ(著)、長綱啓典(訳)、「ライプニッツと国際法 - 多における一としてのヨーロッパ - 」、学習院大学哲学会編『哲学会誌』、査読無、第39巻、2015年、印刷中。

〔学会発表〕(計5件)

ルカ・バツ(通訳：長綱啓典)、「ライプニッツにおける政治的共同体と福祉」、日本ライプニッツ協会(招待講演)、2013年11月16日、慶應義塾大学(三田キャンパス)。

セバステアン・シュトルク(通訳：長綱啓典)、「ライプニッツ時代の医学」、セバステアン・シュトルク博士特別講演会(招待講演)、2014年11月9日、学習院大学(目白キャンパス)。

セバステアン・シュトルク(通訳：長綱啓典)、「医学と保健衛生制度に対するライプニッツの諸貢献」、日本ライプニッツ協会(招待講演)、2014年11月15日、富山大学(五福キャンパス)。

長綱啓典、「医事と教会制度 ライプニッツの保健・衛生行政構想」、日本ライプニッツ協会、2014年11月15日、富山大学(五福キャンパス)。

長綱啓典、「ライプニッツの平和論 - サン・ピエール批判から出発して - 」、実存思想協会、2015年3月14日、早稲田大学(戸山キャンパス)。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長綱 啓典 (NAGATSUNA, Keisuke)
帝京大学・総合教育センター・講師
研究者番号：00646482

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

ルカ・バッソ (BASSO, Luca)

セバスティアン・シュトルク (STORK,
Sebastian)